# コガモ

*Anas crecca*

カモ科・冬鳥

コガモ（オス）

**名前の由来**

体が小さなカモの意味。古名は「たかべ」で、たかは「高」べは「群(め)」の転じたもので高く群れ飛ぶ鳥の意。カモは「浮かぶ→うかむ→かむ→かも」だとする説、「雁(ガン)→かむ→かも」だとする説がある。漢字名：小鴨

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

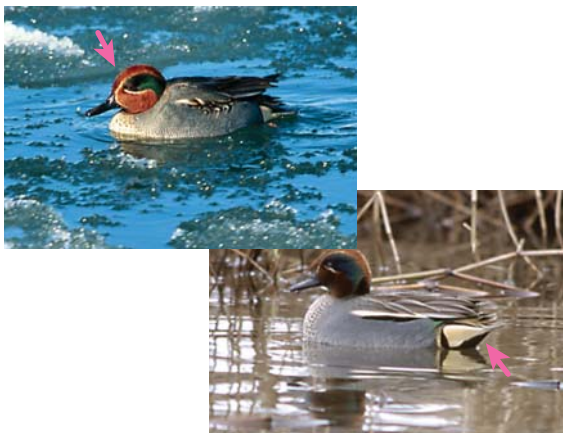
全長（くちばしの先から尾の先まで）オス41cm、メス34cm。オスの頭部は栗色と緑。体は灰色で、肩羽の外側が白いので、体の中央に白い水平の線となって見える。腰の両側には黒線で囲まれた淡黄色の三角形班がある。くちばしも足も黒い。飛翔時に翼鏡（翼の上面中程の後縁にある金属光沢をした羽）の上下に２本の白線が出るが、上の線の方が太い。

メスは褐色で黒褐色の班があり、飛翔中に見える２白線はどちらも細い。

**声**：水面で群れているときには、オスは「ピリッ、ピリッ」と、笛のような声で鳴くことが多い。メスは「グェーグェッグェッ」と鳴く。飛んでいるときにも鳴くことがあるという。

**類似種と区別点**：シマアジ。

シマアジのオスは白い眉班（目の上の眉のような線）が明瞭、メスは眉斑と顔の黒線が明瞭。



コガモのオス。顔の模様と腰脇の黄色い三角が特徴的

コガモのメス
地味だが翼の緑色の部分（翼鏡）が見えると美しい

## 生息環境・分布

河川、湖沼、ダム湖など。草むらの多い氾濫原の小さな水域にも入る。十勝では冬鳥で９月～４月に見られる。

**分布：**ユーラシア大陸と北アメリカ大陸中・北部に繁殖分布し、冬は両大陸南部に渡って過ごす。

日本では大部分が冬鳥として各地で越冬し、ごく少数が北海道、本州の山岳地で繁殖する。

北海道では冬鳥。一部留鳥。河川や湖沼に生息し、夏にも少数が見られる。

十勝では河川や池沼に主に９月～４月まで普通に見られる。一部繁殖も確認されている。

## 生活サイクル

| | １月 | ２月 | ３月 | ４月 | ５月 | ６月 | ７月 | ８月 | ９月 | 10月 | 11月 | 12月 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 十勝出現期 | ━ | ━ | ━ | ━ | ┅ | ┅ | ┅ | ┅ | ━ | ━ | ━ | ━ |
| | | | | | | 越夏するものも | | | | | | |
| ユーラシア高緯度（越夏・繁殖期） | | | | ━ | ━ | ━ | ━ | ━ | ━ | | | |
| | | | | | | 繁　殖 | | | | | | |

## 食性・他生物との関わり

雑食性だが草の種子・葉・茎などを主に食べる。
湿地や水辺を歩きながら泥水をついばんだり、枯れ草をしごいたりして餌をとる。また水面に浮いて水草の間でグチャグチャとくちばしを動かして植物質をこしとったりもするという。
ヨシなどが生える岸辺近くの水草の間にいることが多いという。
捕食者は猛禽類など。

## 繁殖生態

日本では、ごく少数が北海道や本州の山岳地で繁殖期にも見られる。千島、サハリン、ユーラシア大陸の中・北部、北アメリカ大陸の中・北部で繁殖する。
繁殖期は５～７月、一夫一妻。つがいは10月から翌６月に形成されるので、越冬地で秋から春にかけて、オスの求愛ディスプレー（興味深い話の項参照）が見られる。
巣はメスのみが作る。水辺の草むらや藪の下にある浅いくぼみに、草の葉などを敷いた皿形である。産座には自分の胸や腹の綿羽を敷く。
６～12個の卵を産み、産卵後つがいは解消されてメスのみが卵を抱く。ヒナは28～29日くらいでかえり、体が乾くとすぐ親とともに巣を離れる。メスのみがヒナの世話をし、50～60日くらいで親から独立するという。

## 興味深い話

■十勝では基本的に冬鳥だが、一部繁殖も確認されている。大樹キモントー沼で1981年7月20日に子連れの群れが観察された。
■標識調査で９年３ヶ月生存という記録がある。
■冬は狩猟が行われるため、日中は休んで夜間に採食することが多い。
■草むらの多い氾濫原の小さな水域にも入る。ハクチョウなどの給餌場近くにもいるがマガモやオオハクチョウなどと比べると餌付けはされにくいようだ。
■オスの求愛ディスプレイ（ディスプレイ：メスや他の個体に対して誇示をおこなう特徴的な行動）は秋から春にかけて見られる。水面に数羽のオスが集まって１羽のメスの周りを泳いだり、ピロッピロッという声を出しながら首を伸び縮みさせ、尻を持ち上げるディスプレイをする。このとき下尾筒の黒縁の黄色がよく見える。
■つがいは１年ごとに解消し、越冬地で毎年新しいつがいが作られる。
■警戒時には「クヮッ、クヮッ」と鳴くという。
■広い湖にいるときは開けた水面で群れているより、奥まった入り江の岸にいることが多いという。
■十勝地方のアイヌ語では、カモ類一般（特にマガモ）を「ウォルンチカプ＝水の中にいる鳥」という。

コガモ。オスとメス

## 配慮事項

水際に植生の多い水域が必要。


**参考文献**

「山渓カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と渓谷社 1985（1995 ２版21刷）
「原色日本野鳥生態図鑑(水鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995
「北海道鳥類目録改訂２版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理学研究室 2000
「野鳥ブックス－２ フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982（1994 増補版７刷）
「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993
「アイヌ語で自然かんさつ図鑑」帯広百年記念館編、内田祐一・池田亨嘉、帯広百年記念館友の会 2004